

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一冊）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
昭和三十年十月二十五日印刷
昭和三十年十一月一日發行

第二十一卷

第十一號

淨土



五文

十一月號

言 頭 卷

その方法や内容には、仲々悶着もあつて、すつきりしなかつたが、とに角、懸案の、社會黨の左と右とが一つになつた。また、年内だとか、來春だとか、未だもたつてはいるが、保守政黨も、大同一體ならんとの氣配をみせている。

このところ、日本の政界は、大きい統合の傾向にある。事の善惡はとに角として、まとまるということは、分れることよりは、見ていても氣持がよい。

本月は祝い月、おめでたい月。全國の神々が、全部、出雲に集まつて、しばらくの間は留守になる。——神無月の名の由來であるが、人間の生活では、結婚式全盛の季節である。男と女とが結ばれる。而も、うら若い兩性の結合は見る者にとつて、好ましい。

ものがまとまることと、われることとのちがいについては、見方も色々あるであらう。われること、分裂することは、生成發展の過程であることも考えられる。そういつてみれば結婚は戀愛の墓地なり、なんていわれて、考えようによつては、人生の一つの行きづまりともいえる。まとまることも、こういう面で見ると、統合、必らずしも結構とはいえないくなる。

一つのもものが二つに分かれるということは、それぞれが發展して行つてこそ意味がある。逆に、一つにまとまるということも、まとまることによつて、新なるものが生れ出て來ねば意味がない。

わが宗の分裂・統合の上にも、思いが走らざるを得ない。

目 次

菊の香……………吉田絃二郎(1)	おもちや塚の記……………内山憲尙(20)
加行の回顧……………渡邊眞海(4)	佛教入門(2)……………佐藤密雄(11)
加行の思い出……………村田嘉久子(7)	新興宗教讀本(3)…竹中信常(27)
無常の教えるもの……………新保義道(17)	和田合戦(上)……………鶴田湛泉(22)



菊の香

吉田絃二郎

十一月という月はまことになつかしい月である。山茶花が咲き、茶の花が咲き、鶯^{ひたき}が鳴き、青^{あお}鶯^{しとど}が鳴く。とりわけ菊の花が薫る月であると思えば一しお尊い月のような氣がする。

菊の香や奈良には古き佛たち 芭蕉

芭蕉翁も菊の薫りにしみじみと古い時代の御佛たちを拜んでは幽玄の世界を觀じたことであろう。

西行法師は

佛にはさくらの花をたてまつれ

わが後の世を人とぶらはじ

とうたつた。西行は櫻が好きであつたから自分の死後、わが墓をとぶろう人は櫻の花を供えてくれと願つたのであるが、西行法師はそれでよいとしても、大方の佛には菊の花にまさるものはないであらう。

菊は大輪の豪華なのもよく、中輪の肅酒なるもよく、小輪の可憐なるもよい。

菊の花は仙界の花を連想させるが、菊を作る人々も亦俗人の世界を脱した人のように思われる。まだ東京も本郷追分あたりは、からたちの籬にかこまれた古い寺院が並んでいて、白山の上あたりは板橋通いのガタ馬車が走っていたところの話であるが、駒込の奥に住んで菊を作っていた老人があつた。昔は聯隊長など勤めた人で、少尉のところ西南の役に従軍したこともあるという噂も聞いたが、肉付きも華奢で、どう見ても昔、馬上に剣を提げて戦場を馳駆した人であるとは考えられない人柄であり、飄々乎たる仙骨を帯びた老人であつた。

老人の談に依れば菊作りは菊の花が散つた日から始まつて、菊が咲くまで三百六十五日間、一日も休みのない勤勞の連続である。

そして菊花の一番見頃というのは、ただ一日であるということである。ただこの一日の菊花の美しさを見るために三百六十五日の勞作をささげるのである。

「人間の一生もこれと同じではありませんか。常住坐臥、一刻の怠りもなく念佛を申すのも、往生の一刹那のためではありませんか。」とも菊作りの老人は語つた。

老人の令息が訪ねて來て老人の計をつたえたのは、菊の花のさかりのところで、薄霜が降りた朝であつた。

「父はいつものように庭に下りて、菊の手入れをしていましたが、がくりと膝をついて、花ばさみを持つたまゝ、うなだれましたので變だなと思つて、わたくしが庭に跳び下りて見ましたら父はもう死んでいました。大往生というのはあんなのをいうのでしうか！」

薄霜が降り、菊の香のただようところになれば菊作りの老人の死を懷う。

東海道の島田の宿に、町からすこし離れた山沿いのところにわたくしの友人の家がある。あの附近の舊家で、昔から毎年菊を作っている。菊は中菊であるが、中菊にかけては東海道に並ぶ者はないということであつた。

近ごろは勞銀問題や何かでたくさんな菊を作ることなかなか容易なことではあるまいが、わたくしが友人の家を訪ねていつたところは菊作りの老爺が菊を作っていた。かれは小僧時代から中菊作りをつゞけて、そのころ七十五歳だといつていた。少くともすでに菊作りとして六十餘年を働きつゞけているのであつた。

今の世のなかに菊作りでもあるまいと、友人は考えることもあるが、菊作りのために一生をささげて來た老爺の仕事振りを考えると、決心が鈍ぶると語つていた。

中菊作りの老爺もおうかた今は亡くなつたであらうが、かれも亦菊を作りつゝ大往生を遂げたであらう。

わたくしたちのように明治に生まれたものには十一月三日の天長節というものが忘れられない。天長節には雨が降らないものと信じられていた。學校に行けば紅白の餅がいただけりし、紺の香のただよう木綿の紋付に袴を着けたわが姿もうれしいものであつた。

わたくしの父も菊を作つていた。菊作りといつても、野菜畑の片隅に作るので、たゞ八十八夜のころになれば根分けをして、植え付けるのであり、いわば野育ちの菊であつた。

しかし野育ちの菊であつてもそれぞれの菊の氣品もあり、薰りもあつた。そして天長節の朝になれば父はその菊を手折つて三四の親しい家々に贈るのであつた。菊の使いは、新らしい紋付きの羽織を着せられたわたくしであつた。

十一月は一しお遠い昔を偲ばせる。

加行の回顧



渡 邊 眞 海

私は、明治四十二年八月七日より四十八日間、小石川の傳通院に於て、當時の學匠勤息義城僧正より傳法を受けたのであります。今日のように身も引き締る十一月に行われるのですとよいのですが、私の受けた時は眞夏に

道場が開かれ酷暑の中龍の如く流れる汗を身に覚えながら禮拜に勵んだものです。午前、午後の講義の時も義城僧正が見臺の前に三卷七書を置き非常に低い聲で早い調子で息つく暇もなく講ずるので、暑さのため身心ともに懈怠しがちなには閉口し大變苦心を致しました。しかし苦しんで受けた行だけに一層感慨も深く毎歳めぐり來る加行期にはいつも自身内省し明日への正命を誓うので

あります。今も當時が懐しく回想されるのですが、因みにこの傳法の變遷をお話してみましよう。

徳川時代に、淨土宗々制の端緒と見られるものは、慶長二年九月、知恩院の滿譽尊照僧正が、本末關係、學徒養成、僧位進級に關する五箇條の掟を制定し、檀林に下付したことをもつて嚆矢とすべきでありましよう。しかし、これは本家一般に通じた制規ではなく、檀林の制規に過ぎなかつたのでありまして、一家の宗制として制定されましたものは、元和元年に發布された淨土宗法度が初めであります。

この淨土宗法度の中には、傳法條例が制定せられ、傳

法の規則が確立されたのであります。それによりますと「淨土修學十五年に至らざる者は兩脈傳授さるべからず、璽書許可に於ては、器量の仁たりと雖も二十年に満たざる者は堅く相傳せしむべからざる之事」

とあり、淨土修學十五年にして兩脈を傳授し、滿二十年を経てから璽書を授けることに規定されたのであります。それが、寛文十一年の檀林會議の定書に於ては、五重を五年に、宗脈を十年に短縮して居り、その翌年には、五重宗脈共に一年づゝ短縮されて居り、寛政三年の定書には、更に短縮して、五重を三年、宗脈を七年に定めていたのであります。これは要するに、檀林修學に長い年月を費すことは、時代の推移に伴つて社會事情が許されなくなつたという事でもあり、又一面には傳法が次第に形式化して來た結果、このように漸次短縮していつたものであらうと思われまゝ。甚だしいのに至つては、在學僅かに一、二年にして字戒兩脈並に綸旨を頂戴した僧もあり、又幡隨院、靈巖寺等の檀林に於ては、兼行と稱して、五重と宗脈を一時に傳授する風習さえ生ずるに至つたのであります。しかし、大體に於て檀林在學五年もしくは七年が一般に行われていた習慣であつて、この制度は明治維新まで繼續されたのであります。

明治維新にいたつて、諸制度の改變に伴つて、傳法制度も一大變革が行われたのであります。すなわち、明治二年十月に、防長兩國は國外に出遊することを禁ぜられて、その地方寺院子弟は從來のように關東諸檀林に掛錫して傳法することが出来なくなりましたので、止むなく防長寺院惣代報恩寺無關は、錄所に傳燈師派遣を申請したのであります。これについて種々異論があつて、容易に決定をみなかつたのでしたが、結局翌年十一月に、山口縣に傳法道場を開設することゝなつたのであり、檀林外に於て傳法をなす慣習はこれが最初でありました。

次いで、明治七年九月にいたつて、本山檀林協議の結果、從來關東十八檀林に於いて行われていた傳法を、京都四箇本山にも割譲すると同時に、増上寺を大本山としたのであります。爾後四箇本山に於ても傳法を行うようになつて來たのであります。

この制度は九年の改正宗規によつて確定し、又新たに法脈傳承の規則が制定されることになつたのです。それによりますと、五重及び宗戒兩脈は隨宜開遮の方法を用ゐるも妨げなしとするも、法蔭三閔に至らない者には傳授せしめず、布薩は兩脈すでに傳授せし者にて初課以上の者に限るとなし、法脈系譜は宗祖より道譽に至るまで

次第して、それ以後は各自の傳燈或は伽藍譜に依つて行うことを得、と規定したのであります。

明治七年以降、關東では増上寺、關西では知恩院に於て傳法道場を開設する事となりました。同十六年のように、三週間にて五重傳宗傳戒璽書を授與されたこともありましたが、同廿三年七月に傳法條例が發布され、それによりますと、傳法道場は明治九年の宗制通り本山並に檀林とし、傳法資格を宗學尋常科卒業以上の本宗學衆と定め、期間は二週間以上の別行を修し、然るのちに宗戒兩脈並に璽書を一期に傳授することゝ定め、別行本行とも四十八日間行することゝなつたのであります。

この規則は明治三十二年まで行われましたが、同年七月にいたり、新たに傳宗傳戒規定を發布し、傳宗傳戒は宗學尋常科卒業、又は尋常教師檢定試験合格者、及び讚衆たるの資格を有する者に限りこれを行い、その道場は總本山、大本山及び檀林にして、傳燈師は必ずその住職とすることに規定されたのであります。

大正二年九月廿九日、宗規五九號により傳法條例が發布されました、從來行なわれて居りました布薩の相傳を廢止して、傳宗傳戒璽書の三種の傳法にすることに改正をみたのであります。布薩の廢止は既に明治二十一年に

行誡上人が提唱したのでありますが、百萬遍は其の後、同四十二年十月までこれを行い、傳通院は四十五年まで行つていましたが、大正二年一月の委員會に於て布薩全廢が議決されることによつて斷絶したのであります。

大正二年には、傳法道場が夏秋二回開設され、夏受けた者は四十八日間で宗戒兩脈璽書を一期に傳授されたのでありますが、秋の道場は改正規則により、傳宗傳戒のみ傳授され璽者は七年後に受けることゝなつたのです。が、翌年は五年後となり段々短縮され現在では傳宗傳戒の授與された翌年にはすでに有資格とされて居ります。なお、加行係は宗戒兩脈の傳授だけで璽書は受けなくともよいが、教誡師は三級以上で璽書も傳授して居なければなりません。

傳法も幾多の變遷を経て今日に至つて居り、現在では別行本行とも二十一日間の短期間であります。私の理想としては大學出も檢定を受けた者も共に一年位本山にて確り實修をする事がのぞましいと思つて居るのです。しかしそう申しても仲々社會事情も許しませんが、現今の如く佛教各宗が内外兩面に亘り停滯を極めて居ります時一層の奮起と活躍が望まれる今日、私達は加行を宗門の自肅期間として内に反省して、自信教人信能く其の使命を全うせんことを念ずるものであります。(淨土宗宗務長)

加行の思い出



村田 嘉久子



どういふ御縁か増上寺の加行の時に本堂へ参拜した或る人の感想に、加行中のお坊さんの中に、法主様から御講義を聞きながら、居ねむりをして居たのを見た、と言つて非常に、憤慨して居られました。

「コツクリ／＼やつて居る人はまだしも、全^{まる}で深く首を垂れて、寝て仕舞つてでも居るやうな格恰をして居る人も居た、不謹慎もはなはだしい……」とその人は言はれました。

(7)
其時私は思はず、無理もない……」と言ふ言葉が口ま

で出かゝつて、それを吞込んでしまつたのでした。

私は其時、ハッキリと十年前の増上寺に於ての何日間の加行の有様が思い出されて來たのでございます。

「盲蛇におちず」と申しますか、私が有髪のまゝに許されて、品川願行寺御住職、佐藤賢順先生に得度をしていたゞいて、焼残つた、青山梅窓院の、六角堂のやうな、支那風の建物の二階の、講義室に何ヶ月間、焼出された上野坂町の、立退先きから毎朝々々、雨が降らうと風が吹こうと、六時前に坂町の家を出て、上野廣小路まで歩

いて、そこから地下鐵で、青山梅窓院まで……本堂言ふと私は、二十人以上の、もふ立派な、地方の御住職方が皆加行して、印可をいたゞきに、東京へ來ていらつしやる方達から見れば、私は何んにも知らない子供の遊びでいうみそつかすだつたのでした。

只一分もおくられず、七時にはかならず、講義室に座つて居たので、その假本堂が宗務所になつて居た、其處へ呼ばれて、其當時の宗務長里見達雄先生、教學部長の安井大學先生に、それは／＼熱心だと、おほめのお言葉をいたゞきました。

そのお蔭だけで、私は試験にパスしたらしいのでございます。

何故なら、「印度佛教」「支那佛教」「選釋本願念佛集」御法式など、前増上寺執事長同じく大野法道博士、佐藤良智先生、服部英淳先生、阿川貫達先生、故山本諦承先生、こうした方からどんなにか懇切に、御教授を受けたのでしたが、サツパリ解らず、雜記帳も空白だらけで、本當に申譯ない位ひでしたのに、熱心を買はれ、もう一つは、山本先生の法式、これは形から入るのと、御法衣の着方、歩き方、經文の讀み方、など、私は早く覺へま

した。大變樂で、そして楽しく其時間を待兼ねた位ひでしたから、矢張り覺へるのも早かつたと思います。さて昭和廿年六月末から、何ヶ月間、この特別聽講をすませ、いよいよ加行の爲め、増上寺へ泊り込みにて御行をはげむ事になりました。

私は廿何人の、立派な僧侶の中に交つて、タツタ一人の女で、若い學校を出たばかりの學徒も二三居られました。が、私は女である爲め皆さんと同室に寝む事が出來ず其頃椎尾御法主附で居られた、長谷川宣教尼、(現堺市榮松寺副住職)と只今の燒残つた黒本尊の別の廣間の隅つこの處へ、小さな蚊帳を釣つていたゞいて、固くなつて長谷川尼と一緒に寝かさせていたゞきました。

私は女である爲めに、どうしても皆さんより早く仕度をしなければならず、夜中三時には起きて仕度、四時の鐘と共に一番早く賢順先生から拜借の白衣、衣、袈裟を手早くまとひ、本堂へ馳つけました。

其處で、晝まで、少しの間もないいろ／＼の御行、晝食後は卅分ほど休憩して、この時も私は上野で世話してくれた夫婦者が、御辨當を三度届けてくれるので、他の食堂へ行く方や、別に食事を造つて貰ふ方や、いろ／＼

の中に、私一人だけは、増上寺の食堂で、御坊様と御一緒に御辨當をいただきます。

この時、食作法がいろ／＼あつて、一番終りに、般若心經を上げて、それから食事をいただくのですが、其般若心經の皆さんの早い事早い事、私はその頃、全々ろろ覺へでしたので、皆さんがとうに箸を取上げて居られるのに、私だけはおあづけの形で中々終ひにならず、やつと終りになつた頃には、もう皆さん大方がお食事を済ませて仕舞ふ位ひ毎日々々三度々々これが苦しくて、又お坊さん方に恥かしくて、私は般若心經をおかげで一番早く覺へました。さて晝から又本堂でいろ／＼の御行があるのですが、時は九月ではあり、お庭の蟬しぐれが降るやうで、もう三時頃になりますと、如何にハッキリして居やうと思つても、精神蒙臘^{もうろう}として、何を爲て居るのか何を伺つて居るのか、解らなくなつて來るのです。ことに「南無阿彌陀佛」を唱えながらの禮拜を百回、二百回、三百回、と重ねる内に、本當に立つて居るのか、座つて居るのか自分でも解らなくなる程、フラ／＼になります。

私は皆さんより一時間も早く起きて、又夜は九時に終

り、どうしても十時過ぎないと寝られませんか、毎日々々四五時間しか眠つて居ない譯です、それゆへ一層、頭がボンヤリとして來るのです。

前に書きましたやうな、居ねむり、とか不謹慎とか、他から見たら不謹慎と言はれても、それは當然の事でせうが、實は、實際に夕方になると、何を伺つて居るのか解らなくなるやうになつて來るのです。

私はこのお念佛を何百回か唱へる内、お互ひがフラフラになつて居るので、隣りの方に私のお衣の袖をふまれ、て居るのを氣附かず、立上つて、思はず、ドウと後へ尻持ちをついて仕舞つた事がございました。

ハツとして眞赤になりましたが、何んとした事、次から／＼と隣りの方がふむので、五六人が同じやうに倒れて仕舞つたやうな事もありました。

又、法式の實習の時、山本先生が最初、登高座へ上る作法を教へて下され、次ぎ次ぎと皆さんが上つて見るのですが、拜見して居りますと、譯ないやうに見へて、扱やつて見ると中々うまく行かない、ニユーと太い眞黒な足を衣の下から丸見へにして、叱られる方もあり、すべて上れない方もあり、いろ／＼でしたが、最後に私の

番になつて、それまで皆さんお互ひに、散々笑合つたりして居たのですが、私は舞臺の経験もあり、幾らか調子も解つて居りますので、たしか男の方は左から、女は右から、でしたか、一寸忘れましたが私は山本先生、皆さんの前で、實にうまく上りましたので、山本先生から「うまい／＼その調子……」と賞められました、處が其途端上る事はうまく上つたのですが、矢張御衣や袈裟をつけて居りますので、浅かつたと見へて、危^{あや}ふく後へ仰向けに引くり返へりさうになつて、大勢に抱止められるといふ騒ぎを演じて仕舞ひまして、折角先生からのお賞めの言葉をお返へししてしまはなくてはならないハメニなりました。

さて苦しい内にも楽しく、毎日々々を清く、眞驗な、氣持で、加行を終へ、最後の日に御法主様から、御手印をいただき、例の「日課〇〇遍、よく保つや否や……」の御訓しに「よく保つ……」と何度も誓約して、やつとみ佛の御弟子にして頂きました事は誠にありがたい事でございます。

最後の御行として、増上寺の焼跡の御本堂へ夜雨のシヨボ／＼降る氣味の悪い晩に、黒本尊の玄關から、一人

々々、無言のまゝ假本堂まで往復して來る御行があつて私は何んでも一番終りなので、私は夏とは言へ流石に山内の冷氣に、衣の袖をかき合せつゝ、淋しい暗い、あの廣い道を 本堂まで、無言のまゝ、歩いて行くと、先方からかへり道の、矢張加行の御仲間のお坊さんが、トボ／＼と來て、すれ違ひましたけれど、前もつて口を聞く事を禁じられて居りますので、お互ひ眼で挨拶を、それも暗い中ゆへハツきり解りません、やがて、焼残りの假本堂まで辿^{たづ}り着き、其處の阿彌陀様に禮拜して、お念佛を唱へ、引返へさうとすると阿彌陀様の後で、ガタン、と音のした時ばかりは、私肝を冷やしました。あんなに恐ろしく思つた事はありませんでしたが、後で伺うと無言の行實行の爲め、試験官が御堂の暗い中に隠れて居られたのださうですが、あんなに恐かつた事はございません。

いろ／＼の御行を終へて、恐いおそろしい……など、言ふ事は決してない筈の私、この位の事で驚くのは、まだ／＼御修業が足りない證據だと其時しみ／＼思つた事でございます。

佛 教 入 門 (その二)



開 祖 釋 尊 の 生 涯

佐 藤 密 雄

一

(11)

佛教の開祖を一般に釋迦又は釋尊と記すが、此は釋迦牟尼(しやかむに)と言ふべき所を略したのである。釋迦とは釋迦族の意味で、牟尼とは賢人の謂であるから、釋迦牟尼では釋迦族出身の賢人と言ふ意味になる。釋尊が出生した時につけられた名は、瞿曇・悉達多(ごうたま・しつだつた)であつて、瞿曇は日本人の姓の役目をするものであるが然し父祖傳來のものでなく、出生の時に個人名とともに選ぶ個人の姓とも言ふべきものであり、次に悉達多は日本の姓名の名と同じ意味の個人名である。なほ悉達多とは

義を成就すると言ふ意味で、此を日本流に意譯すると義成である。

釋尊の一族である釋迦族は當時強大ではなかつたが名門を誇る名族であつて、又釋尊の生家は其中の宗家であり然も釋尊は長男子であつたから、文字通り名門の貴公子であつたとすべきである。釋迦族の領土は今日の印度の北にあるネパールの南境にあつて日本の千葉縣程の大きさの國であつた。一族が十家に分れて此の土地を共同統治して居たのであるが、釋尊の生家はその中の宗家で、カピラバットウ城主であつた。父は淨飯王(じようはんおう)と言ひ母は摩耶夫人(まやぶにん)と稱した。カピラバットウはラ

ブチ河の流域で、農耕地帯の中心にあつて土地も氣候も人情も和らいた所であつた。釋尊は長子であるが父母が中年に達して得た子供の様で、出生については、母が生家へ趣く途中を、嵐毘尼(るんびに)と言ふ花園で休息し、折柄咲き誇つて居た無憂華(むうげ)の花の一枝を取らんとした時に、にはかに産氣づいて釋尊を出産したと傳へられる。

約二千五百年前の四月八日のことである。

釋尊、即ち貴公子悉達多は、知力も體力もすぐれ、貴族の子弟らしく婆羅門の教師について教養されつゝ、王族武門の統領となる様な教育を受けたのである。出生後七日目に生母の死と言ふ不幸があつたが、たゞちに母の妹が第二の母となつて幸福な少年時代をすぎ、希望に満ちた青年時代を迎へた。十九歳に美姬の耶輸陀羅(やさだら)と結婚するが、此の結婚は同族の青年達と武技を競つて勝ち得た幸福であつたと傳へられる。恐らくは幸福と榮譽とに満ちたもので、世俗的生涯のハイライトであつたと考へられる。

悉達多は當時衰運にあつた釋迦一族に待望された英雄となるべく、武門の統領として教育されて來たのであるが、三十五歳の時に一男子を得ると出家することゝなつたのである。父王や妻の驚きは勿論であつたろうが、一族の落た人も又大なるものがあつた様である。このために、後年悉達多が輝ける佛陀釋尊として故郷を訪れた時でさへ、一族

のものゝ中には、「乞食者は釋迦一族の恥である」として面會を拒絶したのもあつたと言はれる。

二

貴公子悉達多はなぜ出家したかの問題よりも、先づ當時の出家は、中國や日本の、遁世脫俗の意味と異なるものがあることを知らねばならない。當時は哲學すきの印度アリアン人の文化史上でもとくに、思想上の自由主義時代でもあり、戰國時代的に思想の各種が興亡した時代でもある哲學と宗教が不可分な印度的思想であるが、佛教の成立時代には九十六種 of 思想家が學派をなしてあつたと言はれるほどである。此様な多種の思想が輩出したのは、其れ迄、宗教階級である婆羅門族に依つて思想家宗教家たることは獨占されて居たのが、此の時代になつて、婆羅門階級以外のものでも、又婆羅門の説く宗教思想以外の新思想でも、自由に説くことが出来る様になり、新思想家が此を信ずる學徒と共に出家集團を作り、宗教思想の研究と實踐に専念して暮すことの自由も社會的に認められるに至つたからである。

今日でも印度人は、食物に窮し乍らでも哲學を語ると言はれるし、又釋尊の時代には既に壹千年以上の宗教や哲學の思想史的時代を経て居たのである。此の印度アリアン人のことであるから、哲學的宗教の世界に自己の思想を自由

に創造することが出来、それを實踐することの自由を得たことは、我々日本人には考へられない白熱的な、宗教思想ブームを現出した様である。其處で、此様な宗教思想家に對する條件は宗教家としての生活、即ち出家することである。社會も亦、出家して宗教思想に専念するものを婆羅門と同様に尊敬し、衣食を奉施して其の生活を保證したのである。そして此の出家者は、昨日の奴僕も出家者としての今日は、王も敬禮すると言ふ尊敬される地位である。沙門と言はれるのは、此の出家者中の指導者とも見るべき人で、學派の統領級での人達を言ふのであるが、此の沙門の下に學徒としての出家者があつて學派を形成して居たのであつて、釋尊の時代には此種の學派として特に有名なものが六つあつて、此が、彼の佛教々典にしばしば出て来る六師外道と呼ばれるものであつた。

此等出家者の學派は、衣食は乞食して社會の施で生活する非生産的な集團であつたが、政治的にも法律的にも國家社會の支配を受けない、獨立した自己統制のもので、いはゞ國土のない思想國家的存在を形成して居たのである。従つて、社會人が出家することは、すべての人はさうでなかつたとしても、思想界に入り、新思想を提唱して、世俗的支配から獨立した思想王國の主となることも意味して居たのである。そして、此様なことが、當時の知的に優れた青年のあこがれでもあつた様である。佛教の經典には、老いた

る親や若き妻を家に殘して出家する青年が多い爲めに老いた母や若い妻がそれを釋尊に訴へたことが記されてある。又出家者の社會でも、優秀な學徒の動向が重大な關心事とせられ、譬へば當時秀才として知られて居た舍利弗と目連が、サンジャヤと言ふ沙門の教團から佛教の教團へ轉派した時には、あたかも釋尊が引抜きをしたかの如く社會的批判を受けた事件もあつたのである。此等のことから知らるゝ様に、出家することは、宗教思想の世界へ入り、眞理を身を以て追及する積極的な意欲的な行動を取ることであつた。そして又、何よりも重要なことは、當時の知識的靑壯年の最大のあこがれであつたこと、貴公子悉達多も亦時代の先端に立つ知識人であり、その知識人の必然が出家に向はせたことである。

三

宗教を知るには開祖を知ればよいと言はれる。凡そ宗教の性格は開祖の性格に依つて定まると言へるからである。私共は多くの宗教の開祖となつた人々の生立ちや性格について見るものと、佛教の釋尊のそれとは大いに異なるものを見出す。世界的な古い宗教の開祖を見ても、又近くは此頃巨大になつた日本の新しい宗教の開祖を見ても、共通して、貧窮の生立ち若しくは不幸な生活を持つて居る。多少の例外はあるが、其社會生活の中では、知識層でなく「貧

窮者は無知者」である層の出身である。釋尊の様に豊かな生立で、幸福な生活の中に、充分な知識と徳性をさづけられた前身を持つものはほとんどない。生活環境のきびしさに心かたくなになり、窮乏の中に世間を冷く感じて、素直さや圓滿さの缺如したかと思はるゝものが多い。然し、釋尊はまことに人間性ゆたかに、感情のかたよりがなく、圓滿で理性的であつた。

多くの開祖的存在は、平常な世界人から見ると激情的で變質者若しくは狂人とも見られるものがある。特に、神がゝり、又は宗教的な激情にとうすいして、種々な夢遊的行動を取るものを見ては、平常者から言へば狂人の狂態とする外はないと考へられるが、然し、此は其の宗教外の第三者的見方で、此を信する人達から言へば、その様な状態こそが宗教的な至極の境地で、神と人とが交渉一味となつて居る時であり、此の様な時を持ち得ることに、その宗教の誇りがあるとするのである。又開祖の世俗的無教養の如きは、世俗の教養で神性をけがされないことにもなり、其の性質の狂人とも變質者とも見えることこそが、超人的能力の表示であることにもなるのである。開祖は半神半人で、人間に理解出来ない神の聲や意思を知る神的能力和それを人間に知らせる人間的能力を有するものである。今述べた此様なものが宗教の開祖の資格であるとすれば、釋尊には其様なものは全くなかつたのである。人間的教養は充分に身

につけ、正常な人間として、知力も體力も完全に育ち、狂的な超人性は全くなかつたのである。釋尊が十歳をすぎた頃に、文王と共に農耕祭に出席したが、其時に鳥が虫を喰ふのを見て、世間の安穩でない真相を考へたとし、年少早くも宗教的素質を表したとして、釋尊の異常性を説くものがあるが、然し、當時の教育の教科書は宗教聖典のベータであるし、此を教へる教師は宗教家婆羅門であるから、眼前の事象を宗教的に思考するのは當然であるし、少なく共當時の教育を受けて居る限りのものは、すべて宗教的思考を授けられて居たのであつて、釋尊に限つたことではなく異常性とはならない。

一般に宗教の開祖は、はげしい狂的状态になるか、或ひは不思議なまぼろしを夢みる状態になるかして、所謂神の啓示を受けて宗教を開創する。即ち、第三者から狂的状态又は夢遊的状态と見られた時に、神から宗教をさすかるのである。従つて、宗教は神からさすかるのであるから、別に考へ出す爲めの教養も思考も必要がないのである。然るに釋尊の場合は此とは全く異なるのであつて、天上からさすかるのではなく、自ら創り出したのである。悉達多は自身で努力して佛陀となられたが、其れは人間的な最高の叡知を働かせて、世界の眞理を見出し、眞理と一つになる眞知を得たのである。佛陀とは眞理を悟れるものと言ふ意味である。他の宗教では、開祖の異常感覺を通じて、天上からの

福音が地上へ降るのであるが、釋尊の佛教は、地上の人間的理性の働きがその究極的に迄達した時に、地上に見出され樹立されたものである。従つて、天上的異常的宗教とは逆な地上的理性的宗教が佛教である。奇蹟は超人的なもので天上から來るものであるから、地上の佛教には奇蹟がないのである。

四

先年佛教には奇蹟がないからと言ふ不満からカトリック教へ轉じた女性があつた。例へば、キリストが十字架上で殺されたのは、神が我子を地上につかはして人間の原罪を代苦したのであると解釋されるが、開祖が十字架上で罪人として殺される恥辱的事實をば、人間の爲めの神のはからひであつたと解説される時に、「いぶかしさ」が「ありがたさ」に一變する感激的な信仰感情が生ずるきつかけがあるのであるが、佛教ではその様なことはない。此は奇蹟のない淋さだろうか。

又、キリストは死後天上へ復活され、墓の中には死體の着物だけが残つて居たと言はれる。此も信仰の重要な支柱となる奇蹟的事實であるが、釋尊はその様なことはなかつた。晩年八十才の時に、食あたりで下痢をされ、それが原因で逝かれたが、寔に平凡な人間的死であつた。最後の息を引取る迄、佛教を説くことにつとめつゝ靜かに死のねむ

りに入られたのである。死體は火葬にして、遺骨は釋尊ゆかりの八氏族が八分して各々の住地で塔に納めて守護したと言はれ、死體が生きがへる様な奇蹟は起らなかつた。寔に通常な入寂ではあつた。

キリスト教でも他の宗教でも、教祖とか開祖とか言はれる人の傳記が神學若しくは教義の支柱である。キリスト教ではイエスキリストが十字架上で殺された事件や墓から死體のなくなつた復活の事實が宗教的救ひの重要な理由になるのである。開祖の生活行動が超人的で異常であればある程、其等が謎解きの様に解釋されて、有難い神のはからひの明しになるのである。然し佛教の場合には、釋尊の個人としての行動にも、開祖としての働きにも、それが教義の支柱となる様なものはなかつた。攝生と攝度とのある生涯は、人間生活の範とすべきであり、自己のなすべき傳導を生涯を通じてたゆみなく續けられたことは後人の依つてもつて學ぶべきことではあるが、宗教的には、釋尊の傳記を學ばずとも、佛教を學ぶことには差支はないのである。佛教に取つて重要なのは釋尊の教説である。佛陀釋尊を通さずとも、佛教徒は教説を通じて眞理に直接すればよいのである。佛教に十字軍が發生せず、又釋尊の遺蹟への巡禮的熱情が低調に見る原因は遠く此處に由來するとも見られる。釋尊個人の行爲が佛教の支柱でなく、教説が支柱であることは、釋尊自身の言葉に依つても示されて居る。釋尊の

病ひ危篤に陥入つた時に弟子の阿難は、釋尊の滅後は誰を第二世教主とすべきかを問ふたのであるが、その時に釋尊は此様に答へられた。「自分の後繼者を選ぶ必要はない。自分は教へのすべてを説いた。教主が握つて居る秘密奥義と言ふものはないのであるから、教主の必要はないのである。各自が教へに依存すればよい。自分も佛教の教主であると考へたことはなかつた。佛陀として教へを説いたが、一佛教徒としては、その教へに隨ふ一人であつた」と。此れが釋尊の答へであつた。

印度流に言へば教祖とは奥義的教權の保護者で、眞理の根元を握るもので、代々の教祖は、此を傳へるものであつた。即ち一般宗教の「法皇の坐」に坐するものの意味である。釋尊は此を否定したのである。「教はすべて説かれた」とは、眞理への道は世界に公開せられてしまひ、萬人の共有となつた。佛教には秘義はないと言ふことである。従つて、萬人は此の公開の道を各自が勝手に行けばよいと言ふのである。従つて、釋尊の佛教では法皇の坐はないのである。釋尊の最後の言葉は「汝たちは教への灯と自心の灯とに依つて行け」と言ふのであつた。此が有名な二灯の教訓と言はれるものであるが、人間各自の理性と、良識に依つて、眞理への教へに依つて人生を過せと言ふ意味である。

(大正大學教授)

誌上年賀廣告募集

今年も残り少くなり會員皆様には日々御繁忙の事と存じます、本誌も日にあらたに育まれて居りますことは一徧に皆様方の深い御支援の賜ものと感謝申上ます。本誌では正月號に一層の發展と會員皆様の御多幸を祈念し、相互の親睦をはかるため、誌上年賀廣告を掲載致しますので、奮つて御申込下さい。

尚、御申込料は金三百圓で御座います。

(二十六頁よりつゞく)

盛を相ひ見して馳せ戻つて來た。再び朝盛の姿を具て義盛の爵憤も散じ、安堵の胸をなぜ下したのであつた。

朝盛歸宅に及ぶときくと、實朝は直ぐ召し出した。黒衣姿で營中に參じ、實朝に對面して種々慰めの言葉を賜つた朝盛は、將軍の眷顧の厚いのに感激を新たにしてゐた。

こんなことがあつて間もなく、何思つたか義盛は、年來の彼の歸依僧であつた尊道房を、理由もなく突如放逐してしまつた。余りに唐突な義盛の行爲に人々はわけがわからず不審を抱いてゐたが、これは表面追放にことよせて其の内實は伊勢大神宮に戰捷を祈願せしめるためであるとの流言しきりに行はれ、和田一族に謀叛の企てありと取沙汰され、今に合戦が起るのではないかと人心恟々として、鎌倉中物情騒然たるものがあつた。

(つゞく)

無常の教えるもの

新——保——義——道——

無常とは死ぬことだ、と一般には考えられている。勿論死ぬことも無常ではあるが、死ぬことだけが無常ではない。詳しくは諸行無常と言ひ、「萬物は皆移り變り、一刻も同じ

いな死の問題を解決する爲に、國王の地も莫大な財産をも捨て、最愛の妻子、大恩ある親を棄て山へ入られた一事をみてもわかるであらう。

状態ではあり得ない」と言うことである。併しこゝでは無常の語義、意義を學問的にせんさくするつもりはない。唯普通一般に考えられ、使われている意味、それが爲に種々の謗りさえも受けている意味として、それを取り扱つてみたいと思う。

諸行無常即ち萬法流轉すると云う廣い考え

佛教は決して死を好むものでもなく、死ばかりを説くものでないことは、佛教の開祖釋尊の傳記の中で「四門出遊」として説かれて

方の中でも、特に人間の死と云うことを強調するようになったのは何故だろうか。「明日がある」と云う考は、今日よりは明日、明日よりは明後日と、人生の夢を描き、理想を持つて人生に明るい希望を興える反面、明日からはしつかりやろう。まあ今日の日だけは少々怠けても、と徒らに明日をのみ頼みとしてその日／＼をグウタラに送る生活になり易いものである。

生れて來た以上必ず死なねばならぬ、この嫌

巷間よく語られている道話の中に、或とこ

ろに大酒飲の極道息子があつて、その息子に對して父親が、

「お前の酒は甚だ悪い癖があるから、生涯禁酒をしろ」

と命じた。之を聞いた息子が暫らく考え込んでいた擧句、

「あれ程好きな酒を生涯飲まぬと思へば、

せめてもの名残りに、今日一日だけはお許し下さい。明日よりは必ず禁酒致します」

との願ひに、父も尤ものことと思ひ、

「それでは、今日一日だけは許してやる、

明日よりは必ず禁酒するのだぞ」

と申し付けた。ところが翌日になると息子は朝から相變らず酒を飲んでゐる。父親が之をとがめると、

「明日より禁酒します」

と言つて、生涯酒を止めなかつたとのことである。

この極道息子のように、明日から／＼と一生怠け勝になるのが人情の常である。この人間の懈怠を戒め、一寸の光陰輕んずべからずと、現在の一とき／＼を充實した、悔なき時

たらしむる爲に無常を説かれたのである。

明日ありと思う心の仇櫻

夜半に嵐の吹かぬものから

明日ありと思うでないぞ、今日の仕事を明日に残すではないぞ、三日見ぬ間の櫻、夜半に嵐が吹いて折角の花を散らさんとも限らない
思い立つたが吉日、明日と伸さず今日花見をせよと言われるのである。

凡そ正しい物の見方、考え方は、表と裏、

積極面と消極面の両面より、觀察せねばならぬ。佛教で無常——死と云う意味に於て——

を喧ましく説く所以は、人生を消極的な面よりみれば、何時死ぬともわからぬ人生であるから、積極的に何時死んでも悔なきようその日々を充實して働けと教える爲である。從來とかくこと両面を合せ考え、併せ説くことをしなかつたところから、誤解を生じ、佛教は死を説くもの、陰氣くさいものと考えられて來たのである。このことは唐(中國)の善導大師(淨土宗の高祖)の説かれた、無常偈(無常の趣旨を説ける詩文)に、
もろもろの人ら聴きたまえ。日中無常の

偈を説かん。

人生けるときはげみ(精進)なければ

たとえば草樹の根なきが如し。

花を採りて日盛りに置かんに、

能く幾ばく時か鮮やかなることを得ん。

人の生命も亦かくの如し。

うつりかりわ(無常)はたちまちの間なり。

もろもろの道をおさむる人々にすゝむ、

勤め修めてすなわち眞に至りたまえ。

とある。人生は裏よりみれば無常であり、表では精進でなければならぬことを懇切に示されてゐる。

我々は精進の日々、充實した生活をしなければならぬことはよく知りながらも仲々それが出來ない。それはやはり明日と云う日を豫想するからである。

今までは人のことだと思つたに

おれが死ぬとはこいつ堪らぬ

誰でもが、無常のことばを口にしながらも、而も無常は他人のことで、自分一人は例外だと思つてゐるのが人情である。或る人は言う

であろう。他人は例外でも自分一人は明日がわからぬなどと考えていた日には何も手につかないではないか、又どうせ明日がわからぬ人生であるならば太く短く、したい放題、やけに過さざるを得ない、と言うであろう。併し之も又深刻に無常を感じない人の言動である。現實に死と取り組んでいる人、死刑の宣告を受けた人は決して他人ごととは思つていない。その死刑囚が自暴自棄の生活を遂つてゐるかと言うに、死刑囚程不自由な拘置所生活の中からも、實に意義のある、充實した、眞剣な生活をしている者はないと言うことが死刑囚を取り扱う人達の等しく口にするところである。近刊、大阪拘置所長、玉井策郎著「死と壁」にもその間の消息が詳しく述べられてゐる。

天文学と取り組む〇死刑囚が、京大上田教授と面會後新聞に語つた言葉に「會えて全くうれしかつた。よく來て下さつた。もうこれで何も言うことはない。私の命は日一日と迫つてゐる。こんど扉をたゝかれる時は死刑執行の日かも知れない。それまでは勉強を續けたい。そしてつともつと先生にいろんな疑問の點をおきゝして、死ぬ迄には、はつきり

した確信をつかみたい」(同書二二九頁)とある。一般社會人にとつてさえ縁が遠いと思われ勝な天文學に對して、獄中獨學で死ぬ迄研究を進めてゆく氣持こそ、眞に無常感を體得した心境である。戦地に於ける軍人がこれがいよいよ最後だと思ふ時には、決して變な行動は出来るものではない。問題になるような行動に出るのは駐屯とか、餘裕のある時であると言われている。かく無常に徹する時自らそこに精進の姿が、現われて来るのである。「佛教とは死ぬことを教えるもの」でなく、「精進これ佛教」が力強く表われてくる。

宇宙の大鐵則、人生の道理である無常の理を體得することによつて、それが積極的行動となつて日常生活に現われ、怠け心なく一心に勵んでゆくと云う精進となるのである。

昔一休禪師が小僧時代、茶碗を破つて隠して置いた。そして師匠に

「和尚、生あるものは……」

「必ず滅す」

師匠の答があるとすかさず

「この通り茶碗が破れました」

と、自分の破つた茶碗を出したと云われている。こゝに一ヶの茶碗がある。この茶碗は手

荒く扱つて、ぶつつけたり、落したりすれば破れるものであるから(無常)、落さないようぶつけないよう、破れないように、大切に(精進)取り扱い、何れ破れるものであるかも知れないが、一日でも永くこれを使用出来るよう心がけることが、正しい物の取り扱いであり、茶碗そのものを生かして使う所以である。若し「どうせ落せば破れるものであるなら、今のうちに破つてしまつた方が氣が楽だ」と、茶碗を破る人があるならば、その人は正常の人とは言われないであらう。

茶碗は破れるものであるからと破つてしまふ人がないように、又死刑囚の例をみてもわかるように、眞に人間の無常を知つた人は人生を輕々に考えるようなことは決してない。充實した人生を送る爲にはこの無常を知ると云うことが大切なこととなつて来る。

濱までは海人もみのきる時雨かな

何れ海につけば海に入つて濡れるところの海人が、何故みのを著て雨を防ぐのであらうか。數日後に死刑執行を控えた死刑囚が、何故些かの病氣にでも神經質程に身體を大切にするのであらうか。

この秋は雨か嵐か知らねども

今日のつとめに田草とるなり

自然相手の農業、收穫期の秋の天候はどうなるか分らない、天候異變、天災等によつて收穫皆無、收穫半減になるかわからない。そんなことを考えていたつて何の役に立とう、とにかく黄金の稔を待つ迄には今日は今日のやるべき仕事、明日は明日のやるべき仕事がある筈だ、今日の仕事を明日に伸ばさず、炎天に汗を流しながら、雨天の中に雨を拭いながら、今のつとめの田の草とりにせつせといそしむ姿こそ、精進の相である。

福田行誠上人から「仕事が忙しくて毎日念佛申す暇が無ければ、せめて死ぬ最後の一日だけ念佛申しなさい」と言われ、さて死ぬ最後の日は何日かと考え、それから毎日念佛に精進した商人、日々作るところの句は皆辭世の句だと俳句に精進した芭蕉翁、一切の時を臨終の時と考え、その日／＼の仕業に精進する姿、そのどこに暗い影、陰氣くささがあるだらうか。否そこには進んで止まざる希望に輝く明るさがあるのみである。無常感に徹し、而もその日／＼の自分に與えられた使命に向つて精進することこそ、佛陀釋尊の教え給うたところである。

記 の 塚 や ち も お

内 山 憲 尙

子供たちは人形とお話が出来ます。動物の人形たちと仲のよい友達となつて遊べます。

幼児にとつては人形は生命のある、自分と同じ仲間なのであります。人形と共に語り、人形と共に食事をし、人形と一緒に寝ます。

人形がどこかへぶつかれば「痛かつたでしょう」と人形の頭をなでます。人形の足がとれれば「可哀そうに」と同情します。

私たち大人はうつかりすると、人形の足のとれたまま一月も二月もすててあることが多いのではないでしょうか。

人形に同情する気持ちには尊いものであります。私たち保育者はこの尊い童心を、むしり取つたり捨て去つてはいけないと思います。

この意味から、「おもちゃまつり」を始めたのであります。

もう十七八年にもなりましょうか、足のとれた人形首のとれた動物人形などもう捨ててしまふような玩具を家庭から持ち寄つて、園庭のお地藏様の前にかざり、お花や香をそなえて、供養をして貰つて、お地藏様の後に埋めてやりま

した。年中行事の一つとして毎年行つて來ました。

去る九月二十三日の彼岸の前日に「おもちゃ塚」を建てまして、今年からはこのおもちゃ塚の前で供養をしてやることにいたしました。高さ五尺位の青石で、字は拙ない乍ら、眞心を込めて私が書いてやりました。

本年は十一月十八日に「おもちゃまつり」をしてやることになつています。幼児たちは「おもちゃまつり」を今から首をながくして待つています。

「おもちゃまつり」のねらいは、人形や玩具に同情心を持たせることによる宗教的な導きを主目的とし、玩具に對しての愛情の面をねらつた情操的な教育と、玩具を粗末に取り扱わないという躾けの面とがあたられます。

この間も、この「おもちゃ塚」の前の石の上にこわれた小さい人形が置いてありました。「おもちゃまつり」を待ちきれない子供でしようか、それとも、手のとれた人形を可哀そうに思つたのでしようか。

(聖美幼稚園長)



和田合戦



鶴田湛泉

東山の麓大谷は四隣寂としてゐた。人影もない大谷の法然上人の御廟の前に、しきりにぬかづいてゐる一人の沙門がゐた。

「今日よりは上人を師と仰ぎ、念佛を行といたします。何卒、聖靈照覽を垂れ給ひて我が先非を許し給へ」

と、合掌底頭してゐるのであつた。その頬は涙にぬれてゐた。

彼は、禪林寺の大納言僧都靜遍であつた。

靜遍は、池の大納言頼盛の息で、醍醐の座主、勝憲法印を師として小野流を受け、又、仁和寺の上乗院の法印仁隆から廣澤流を學んだ眞言の兩流の深奥を究めつくした碩徳であつた。

その頃、世を擧げて念佛門に歸し、法然上人の著した選擇集を尺尊の説かれた經典のやうに尊崇してゐる隆盛に燃ゆるやうな嫉妬の心を抱いた彼は、選擇集を破し念佛門に反撃を與へるため、筆の刃を研ぎ激烈な駁論を書かんものと、料紙をととのへたのであつた。

靜遍は、先づ誤謬を指摘せんものと、選擇集を丹念に検討し初めた。が、讀み行くうちに、彼の心は、一句一句に力強く魅せられてしまつた。こんなはずではないと、尙も心を勵まして讀み耽るうち彼の目頃の考へとは大いに相違して、大きな感動をさへ與へられて行くのだつた。

(末代の凡夫の出離生死の道は、たゞ稱名の行にあり)との端的な主張に、完全に頭を下げざるを得なかつた。

「あな、恐ろしき事を企てしことよ」

自分の僅かな學才にうぬぼれて、選擇集を批判せんとした思ひ立つた狭い量見を悔ひ初めてゐた。彼は自分の非を知ると悔悟の涙で胸が一杯になり、居たゝまらぬようになつて法然上人の墓前にぬかづいたのであつた。

今は心から選擇集に共鳴してしまつた靜遍は、僧綱の榮位を退き心圓房と號して念佛の行者に轉向してしまつた。それのみか、選擇集を支持するため續選擇をさへ書き上げたのであつた。

一偈を結んで、彼はいふ。

一期所ニ案極ニ 永捨ニ世道理ニ 唯稱ニ阿彌陀ニ

語嘿常持念 と、

靜遍は、賴盛の五男だつたので公卿達の尊信する者も多く、關白道家も、屢々彼を招じて念佛を行じ選擇集の講議を聞いた。

(その辯才上古の人に恥ぢず)と、靜遍の説法の巧みさを道家は日記で稱讃してゐる。

念佛の教を關東に廣めんものと靜遍が鎌倉に下ると、將軍實朝はよろこんで彼を迎へた。

靜遍の父は平賴盛であり、祖母は池の禪尼だつたので、父賴朝の命の恩人のやうである彼を、實朝が心から歡待したのはいうまでもない。

建保元年三月廿三日のこと、實朝は、靜遍僧都並に走湯山の淨蓮房等と法華の僧を營中に招いて、法華淨土兩宗の旨趣を論談せしめた。

喧々愕々の宗論に實朝初め家臣は興深げに聞いてゐたが、殊に實朝の寵臣、和田朝盛は、靜遍の言葉に深く感動してゐる容子であつた。

二

建保元年二月十五日のこと、千葉介成胤は、一人の法師を縛し捕へて北條義時の宅に連れて來た。調べると、その法師は、信濃國住人青栗七郎の弟阿靜房安念といつて泉親衡の密使であることが分つた。

賴朝亡きあと執權北條時政の威勢他の諸豪族を壓してゐたが、ま

すく自己の權力の確立に専念し初め、そのためには自家の反對分子の排除を取て行ひ、他の勢力を驅逐しようと、終に將軍賴家を廢し、やがて修禪寺に於て誅し、更に比企氏を亡ぼし、賴朝以來の忠臣、畠山重忠をさへ自滅せしむるに至つた。

かうした北條氏の專横を憤つたのは、鎮守府將軍源滿仲の後裔、信濃國の泉親衡であつた。彼は源氏の衰微して行く形勢を坐視するに忍びず、賴家の子千壽丸を擁立して北條氏を除かんとする計畫を立て、僧安念をして廻文を持たせて密使とし、諸國に潜行、將士を誘ひ一味同心の糾合に努力せしめてゐた。義時の余りな施政に反感を抱いてゐる豪族も少くなく、彼の誘ひに應じて一味に加擔する者も多くゐた。たま／＼千葉介を訪ねて彼をも一味に引き入れようとしたが、義時に二心なかつた成胤のため却つて直ちに捕り壓へられてしまつたのであつた。

義時は、安念を山城判官行村に引き渡して、その實否を糾問せしめた。

早や觀念したのか、安念は細大もらさず自白したので、彼の口から謀叛の全貌が明白となつた。直ちに一味の逮捕方が諸國の守護地頭へ下された。既に親衡に心をよせ陰謀に組するもの百三十余人、伴類二百の多きに及んでゐたからであつた。

事前に計畫を探知して安念の口から張本の親衡が建橋に隠れてゐることがわかると、召し捕りの命を受けた工藤十郎は直ちに屈強な郎黨二十余人を率いて建橋へと急いだ。

案内を乞ふて親衡に對面して搦め捕へようとしたが、見事に看破されて、其の場で工藤は親衡のため首を打ち落されてしまつた。

「ぬかるな者共」

「それい」

とばかり、親衡の郎黨打つて出たので、兩者の間に白刃が切り結ばれた。が、工藤の郎黨は、もろくも一人残らず返り打ちになつてしまつた。身の危険を感じた親衡は、其の場から行方をくらましてしまふ。

この事件に、鎌倉に一大事勃發したと上を下へと打つて返し、その騒ぎは一通りでない。

(鎌倉に兵亂起る)と傳へ聞いた諸國の御家人は、「いざ鎌倉」とばかり、陸續と鎌倉へ馳せ集つて來た。

三

上總國伊北莊に隱栖してゐた老臣和田左衛門尉義盛も、この動亂を耳にすると、いち早く駒を鎌倉へと走らせ幕府に伺候した。幕府の安危もさることながら、義盛の子息四郎義直、五郎義重の兩人が親衡に加擔して捕へられてゐたので、事の大事に驚き且つ深く歎いて二子を許さんことを哀訴せんがためであつた。

何しろ頼朝が鎌倉に幕府を開くと侍所を置いて義盛をその別當として將士の進退を司らしめた程の功臣の嘆願である。義盛の積年の勳功と忠節に考へ合して、義直義重の二人の罪名を除いて特に許されることゝなつた。

「義盛の老後の面目これにすぐるものはございませぬ」

彼は喜びの涙にむせび、老の目をしばたいて退出した。

すると、その翌日のこと、木蘭地水干に葛袴を着して威儀を正した義盛は、一族九十八名を引きつれて幕府の南庭に列座して、

「今度の囚れ人、和田平太胤長を何卒許し給はれ」

と、甥に當る胤長の赦免を乞ひ、熱意をこめて懸命に哀訴したのであつた。

ところが、義時は、

「平太胤長は謀叛の主謀者である上、種々の計畫を廻らしてゐたものなれば許すことは斷じてならぬ」

といつて許さなかつた。そののみか、庭にひき据えられた胤長は目の前で高手小手に縛り搦めた上、一族の列座してゐる前を獄司に繩をとらせて獄につないでしまつた。義盛等一族は憤激の目でぢつと見送つてゐた。

間もなく彼を陸奥國岩瀬へ流罪に處してしまつた。

胤長の屋形は荏柄の祠の前にあつて幕府の東隣に當つてゐたことゝて出入に何かと都合がよかつたので關所になると、近侍衆の者で望む者が多かつた。

これまで没入の弟宅は皆その同族に賜ふ習になつてゐたので義盛は、將軍は近く侍してゐる局に依頼して譲られんことを乞ふた。

これは直ぐ實朝に聞き届けられて許しがあつたので、よろこんで屋形に番人を置いてゐた。

ところが、どうした事か、義時は更に實朝に乞ふて之を得てしまつた。

思ふがままに政令を動かして北條の實權が強大にならうとしてゐた時のことである。實朝は義時の要求を拒けることが出来ない程無力になつてゐた。實朝は絶えず外戚北條の壓迫に苦しみ殊に頼家が殺されて後は、不安と懊惱が益々募るばかりであつたから無理がなかつた。

當然、義盛は、

「解せぬお仕打よ」といふかつた。

すると義時は、この屋形を金窪行親、安藤忠家の二人の服臣に割り興へてしまった。そののみか、和田の留守居番久野谷彌次郎を追ひ出して、行親忠家が分取つて強引にも移住してしまった。

かうなつては、かつて頼朝の重臣として羽振をきかしてゐた義盛の面目はまるつぶれである。義時の自問本位の謀略をやつて、義盛に對するいやがらせはいよく露骨に現はれて來てゐた。

「これほどまでに和田の威勢が落ちたのか」

との落膽と吐息をもらさずにはゐられなかつた。

「この屋形を義時に賜ふこと重々口憎しきことである。この上は生きて世にあつて何を面目としよう。皆北條の所爲なれば今に思ひ知らせてくれようぞ」

約束を破古になつたのも義時のためと、義盛は煮えかへるやうな憤懣を抱くに至つた。

先きには、自分の鼻負目^{ヒヤメ}にみても許してくれると思つてゐたに、一族を率ひて胤長の赦免^{シヤン}のことを訴へたのに恩許の沙汰ないのみか、あまつさへ其の身を面縛して辱めた上、流刑に處してしまつたことを思ひ合せ、度重なる専斷に義時に對する憎惡と押へ切れぬ怒が腹の底からこみ上つて來て、彼は一族と共に、その日から幕府への出仕を止めてしまつた。

北條憎しやの憎惡は日増しに更に深まり行く、頼朝の股肱^{コウ}として重用されて來た彼である、今にして北條倒さずんばの義憤に燃え、終に親族朋友を娶めて日夜謀議すること歳余に及んだ。土屋義清、横山時兼、古郡保忠等之と相結んで將に時を得て事を擧げんとするに至つたのであつた。

四

義盛の孫、和田新兵衛尉朝盛に對する實朝の寵愛は、近習の中でも彼に越ゆるものはない程であつた。歌道に達し歌學にも造詣の深い彼は、幕府の歌會にはいつも召されて秀歌を詠じて實朝の御感を得てゐた。

ところが、この頃の彼の眉には何故か苦惱の影がたゞよつてゐた。朝盛の身邊には、複雑な事情が起つてゐたからであつた。

彼の父常盛は義盛の嫡子であつた。父や祖父は、あの事件以來一族と共に幕府に出仕せず秘かに叛逆を企てゐたことゝて、同族の強い壓迫があつて朝盛は出仕も出來ず蟄居を余儀なくせしめられてゐたのであつた。

秀逸な和歌を詠み出す柔和な半面、武藝に於ても一族中にも秀でゐた朝盛ではあつたが、叛逆を思ひ止まらせるほど同族を押へる力はなかつた。

而も、今にも兵を起すかのやうな憂慮すべき事態に立ち到つてゐた。多感な朝盛の懊惱は深まらざるを得なかつた。

叛逆に與すれば主君を射ることゝなり、さりとて與しないと父祖への孝道に逆くことゝなる。兩者の板ばさみに思ひなやみ去就を決しかねてゐた。

彼が、隙を見て靜遍の假遇の庵を訪れたのは四月十五日のことであつた。先月、營中で法華淨土の法論が行はれた時、淨土の法門を説く靜遍の熱論に深い感動を覺へ、耳そば立てゝ聞き入つてゐた彼は、靜遍に會へば、何とか心に一つの燈を見出すことが出來ると思つたからであつた。

心の悩みをあからさまに訴へると、靜遍は慇懃に彌陀の救ひを説いてきかせた。靜遍のすゝめによつて、それ以來彼は念佛を怠らず勤んだ。動亂する心も、誦經念佛によつていさゝかおさまつて來た。如來の光に照らし初めると、驕然と發心を催した朝盛は、いつその事出家を遂げようと決心するに至つた。

で、年來の重恩を謝し暇乞のため月光を浴びて營中に參じた。北條の壓迫のためやむなく政事より歌道三昧におぼれてゐた實朝は、その時、侍女を侍らして觀月の和歌の會を催してゐる最中であつた。

青白い月光は、大廂からいつぱい廣縁に射し込んでゐる。くつきりと侍女達の苦吟の姿を浮び出してゐる。

朝盛は、實朝に命じられるまゝに幾首かの歌を詠じて獻じた。いづにかわらぬ秀逸な彼の歌に、實朝の御感はいやましてゐた。喜びの余り實朝は、數ヶ所の地頭職に任ずとの一紙の下文を朝盛に賜るほどであつた。歌が歌道に及ぶと夜の更けるのも知らない。月が南の方へ落ちる頃やうやく朝盛は退出して來た。

身に余る御諒を拜して實朝の寵遇を思ふと、感激が胸一杯迫つて來るのであつた。將軍家へ粉骨碎身してあくまで忠誠をつくすべきか、それとも父に従ふべきか、あれを思ひこれを思ふと、狂はして程の惱みに沈んで足も重い。

明星を仰いで夜明けの春寒の道を歩む足は自宅に向はず、いつしか淨蓮房の草庵にたどりついてゐた。彼は淨蓮を師として髪を剃り實阿と號したのであつた。

恩愛の絆を斷ち切つた實阿の朝盛は、これ以上紛争の渦中に巻きこまれたくないと思つたのか、直ちに京都へ進發してしまつた。

五

その翌朝、朝盛俄かに出家した次第を郎黨走り來て祖父義盛に、かくと告げた。思ひもよらぬことゝて、義盛の驚きは大きかつた。そこへ、朝盛の居宅から一通の遺書が発見せられて届けて來た。それには、

「叛逆の企て今となつては止められ難きものと思はれます。されど、一族に與すると主君を射奉らねばなりません。主君に従へば、祖父を敵とせねばなりません。この上は、出家して自他の苦患を免るゝ外に道はありません」と、苦衷を訴へてあつた。

これを讀んだ義盛は、

「淺慮な朝盛め、身勝手な振舞ひよな」と怒つた。

義盛にとつては、目に入れてもいたくない嫡孫のことであつたし、文雅な道に達してゐたが、又、軍事にも長じてゐた猛々しい若武者であつたので、突然の出奔を地駄太踏んでくやしがつた。

「すでに法體となつてゐても、追つかけてつれ戻つて參れ」

不機嫌極まりない義盛は、聲も荒らに四郎義直に命じた。

義直は、馬に鞭して直ぐ後を追つた。一方、義盛に謀叛の企てあるとは夢にも想像しない實朝は、信寵してゐる朝盛が僧となつて出奔したときと、いたく驚き惜しんで父祖の哀傷さぞやあらんと、刑部丞忠孝を使者として義盛を慰問せしめた。

數日後、駿河國手越ノ驛で朝盛に追ひついた義直は、入道姿の朝

(十六頁に續く)



お墓と菩提寺

—新興宗教讀本—
その三—

竹中 信常

一 昨年頃までは、新興宗教の話が出て、お寺の住職がたは

「なーに、あんなものは一時的なものさ。死ねば結局お寺へ戻つて来る。何しろ、お寺では墓を持つてゐるからねー」と、すこぶるのん氣に構えてゐる人が多いようでした。

その當時、私が靈友會についての實態調査をしてその際、お寺では、靈友會その他の新興教團の信徒に對して、どのような手段を講じてゐるかを調べてみましたところ、大部分のお寺が、「そのままにしておく」という、放任状態であつたことが分り、少なからず、おどろいたものでした。それというのも、寺と檀家とは、「お墓」を仲介として、離れがたい關係にあるのだという、確固とした先入觀が、當時

の住職がたの頭にあつたからでした。

また、實際、當時、新興教團の側でも、「家の宗教」と「個人の信仰」とは別のものだ。家としては、先祖代々の菩提寺へお参りしてもよい。但し、個人的には、自由にどの教團に屬してもよいものだといつて、暗に、菩提寺への参詣を、すすめさえする教團もあつたくらいです。私はこの點について、「二重信仰」が新興教團の一つの特色であるとも考えたくらいでした。

ところが、新興教團の側でも、教團の組織が段々にととのつてき、經濟的な基礎を確立する必要性が増して來ると今までのように、單なる會員制度として、自由に入・退會を許してゐたのでは、都合が悪い。矢張り、一定の固定的な信者を獲得しておかねばならないと考えるようになり、ました。そのトップを切つたのが、立正交成會の小平靈園

の建設です。

今まで、既成教團のことを「墓の番人」だとか、「葬式屋」だとかと、さんざん悪口を言っていたのが、自分の教團の経済的地盤を考えると、他人のことどころではない。自分もまた「お墓の番人」になつてしまいました。これにならつて、他の新興教團も、大なり小なり、教團所屬の墓地を持つたり、或は公設の墓地の一部をこれに當てたりして、信者の固定を計るようになりました。

お寺と墓地。寺と葬式・法要。こういった結びつきには色々とも問題もありましょう。佛教革新論で有名な友松圓諦師の神田寺も、創設の當初は「墓地のない寺」を標語にしていたようですが、今日では、深川にある寺用墓地へ檀家を送仰するバスを走らせたり、上野寛永寺墓地内に、特定墓地を借り入れたりしています。私は、何もこのことが、悪いというのではないのです。むしろ、逆に、これが矢張り現実的な寺の在り方であると思うのです。

どんな社會にも、またどんな時代にも「理想」というものは必要です。お寺にしても、その理想的な形體は、お墓とか葬式とかに限定されるべきではないのです。然し、ひるがえつて考えてみますと、そうだからといつて、お寺と墓地とが結びついてはいけません。僧侶が葬式を行つては悪いということも云えないと思います。ただ、云えることはお寺や坊さんの仕事・役目が、ただ墓地を管理したり葬式

法要を行つたりすることだけに限られるものではないという事です。お墓のお守りも葬式をすること、皆、お寺や坊さんの役目なのです。佛教が日本に傳つて來て以來、日本の風俗習慣とびつたり合致して、自然のうちに出來上つた仕事なのです。だが然し、これ丈けが仕事ではないというのです。つづめていえば、ほかにも澤山せねばならぬ仕事を放り出して、お墓と葬式丈けにかちりついているところが、或はかちりついているように、世間から見られているところに、既成教團の過誤があるのです。

二

大變、くどい、いいまわしになつてしまいました、この所は、非常に大切な所ですから、しんぼうしてお読み願います。

理想的には、お寺は、お墓とか葬式とかにのみかかわつてはいけません。然し、實際の、社會的な存在形體としての宗教々團は、どうしても、こういったものと、結びついて行かねばならないのです。

何故かと申しますと、宗教とか、信仰とかというものは、いかなる宗教でも、信仰でも、すべて、「人間のいのち」ということに、深いつながりを持つているのです。いのちとは生きていることであり、生きているということとは、死んでないということでもあります。極端な言い方を

すれば、「いのちは死によつて支えられているもの」です。こういった關係から、すべての宗教は、「死」ということを基礎または出發點として、成り立つてゐるのです。釋尊が出家なさつたのも、四つの門から順々に町へ出て、生・老・病・死という、人間のさけられない運命を、現實の相の中すなはに御覽になつたからです。キリスト教もまた、その教義の中で一番大切なのは、人の子イエスが、ゴルゴダの丘で、十字架の處刑に遭つて、死んだ瞬間、神の子であり救世主たるクリストになつたのであります。イエスが、若し十字架に登らずに、平氣で生きていたら、キリスト教という偉大な宗教を、私共は持つことが出来なかつたかも知れませんが。

こうして、宗教は、若しそれが本當の宗教であるならば、何等かの形で、死というものをみつめてゐるはずで、それ故、佛教々團もまた、人間の死ということに、多大の關心を持つて、死に際して、悲しみ、悩み、悶える人の心に安らかな、平和な息吹きを與えることを、その任務の一つとしてゐるのであります。

こう考へて参りますと、葬式・法要こそ、人の心に佛教信仰を芽生えさす、大切な機會でこそあつて、決して、これを避けるべきものではないのです。私は、こう信じています。宗教家こそ、人の死に際して、その亂れた心を静め痛む胸を癒してやらすして、一體誰がこの役目をはたして

下されるのか。お寺は矢張り、葬式法要を一つの機會としてこれを通じて、その信仰を弘め、墓地という、子孫が夫々の先祖を回顧するに適しい施設をととのえて、人々の心に、床しい尊崇の念を育てて行くべきであります。

既成教團が、葬式法要をとり行い、墓地を管理して來たのは、本來は、こういった氣持ちからだつたのです。そしてこれは、既成教團も、新興教團も、同じであります。それだからこそ、先にも申し上げたように、新興教團の中にも、專有の墓地を設けるものが出て来るようになったのです。

こうなつて來ると、「なーに、死ねば戻つて來るさ」と、のん氣に構えていらなくなりました。家の宗教は菩提寺へ、個人の信仰はこちらへと、割り切つたようなことを云つていた新興教團で、お墓もこつちへ、といい出したのですから、話はむづかしくなりました。

現に、北海道の或る地方では、日蓮正宗に轉宗したものが、菩提寺へ、「遺骨引取證」なる、日蓮正宗發行の證明ならぬ證明を持つてお骨をかえして下れといつて來るようになったとのことです。今更、ここで、お骨のとり合ひをしても始まらぬことですが、然し、これに對しては、よく考へてみななければなりません。而も、日蓮正宗の場合には、少數乍らお寺もあり、従つて、そこには若干の墓地もあるのですから、「お墓がある」ということ丈で安心して

た從來の既成教團としては、全く致命的な問題です。これは、何とかしなくてはなりません。

三

寺院の經濟的基礎が、檀家組織にあることについて、これが良いことか悪いことかという問題は、今の所とり上げないこととします。然し、いづれにせよ、檀家又は信徒を持つということは絶対に必要です。檀家のない寺、信徒のない教會などは、寺でも教會でもありません。してみると寺であり、教會である以上、そこに集る人々を、何等かの形で確保しておくべきであります。住職や主管者の宗教的人格のいかんが、人々をつなぎとめておく、重要な要素であります。それと同時に、個々の人々の自由な結びつきのほかに、家または家族を單位とした結びつきも大切です。家を單位とした、或る程度、歴史的意味を持つた關係を持つて結びついている家を檀家といい、その寺を菩提寺と呼んで差支えないでしょう。

宗教や信仰は、夜店でバナナを買うのとはちがいます。そんな行き當りばつたりのものではありません。隣りの奥さんにすすめられたから、病氣の時に親戚の者に導かれたから、會社の上役にいわれて義理が悪いから、といった、目先の、ほんのささいな動機——而もその動機の底を流れるものは、大抵の場合は「現世利益」という利害心であ

ります——から選びとるべきではありません。果物屋の店先きに並んでいる、ミカンの山を、どれにしようかと、キヨロキヨロと眺めて決めるのとはちがいます。もつと、眞劍に、——全く、信仰というものは、その人の生活の方向を決定し、運命を左右さえするものでありますから、他人にきいたり、自分もよく、反省したり、研究もしたり、して決めねばなりません。そんなことよりも、なお大切なことは、信仰を變える前に、はたして、今迄の信仰を本當にやつていたかどうか、よくふりかえつてみる事が大切です。私の所へも、よくそういう人が参りますが、そんな人に限つて、今までは、ろくに佛壇に向つて手を合せたことも、お念佛も唱えたことのない人なのです。そんな時、私はいうのです。

「あなたは、信仰を變えるといいますが、それでは、今までの信仰のどこが悪いのですか。今までの信仰がいやになる程、本當にお念佛をとなえたことがありますか。唱えて唱えて、その上でどおしても信じられないというのなら仕方ありませんが、ろくに信仰もしないで、今度また新しい信仰に入つたところで、また、すぐにあきてしまふにきまつています。一度でいいから、眞心からお念佛を唱えて御覽なさい。……」

そういつてから、信仰というものは、品物とちがつて、見たり持つたりするものではなく、それが、自分の血とな

り肉となるように消化すべきものであること。お念佛を「食わず嫌い」しておいて、どうして、お念佛の本當の味が分るものか。味も分らずに、いい悪いのといつて、結局、一生涯まともな信仰を得られずに、迷いの中に死んでしまふのではないでしようか。こういったことを話して上げるのです。

このような人々は、子供が他人の持つてゐるお菓子をほしがると、少しも變らないのです。自分の持つてゐるものの、本當の價值が分らないのです。これを分らせるのが宗教家の役目なのです。

そこで、話はもとに戻りますが、個人の信仰の家の宗教という、二本建てのカラクリが問題になるのです。個人と家というものを、全く切りはなしてしまふことは、理窟では出來ますが、實際には、そんなことは出來ません。出來ないことを出來るように云うからカラクリというのです。家のない人間、家族を持たぬ個人なんていうものは、幽霊みたいなものです。家といつても、無論建物のことではありません。人はどんな人間でも、両親に生んで頂き、自分も亦、妻をめぐつて、子供を生む。親があり、妻があり、子供があれば當然、家庭というものがあつて、家庭があればそこにはいやでも、先祖と子孫という、縦のつながりが出來て來ます。

敗戦後、家族制度の改變で、法律的には大分變つて來て

東 運 爾 語

大村先生記念文叢刊行會篇

紹

介

大村桂巖師逝いて一年、師とゆかりの深い人々が師の遺業を偲んで、こゝに「東運爾語」の刊行をみた。思えば、七十五年の生涯を宗教教育の先驅者として、一途に歩まれ遺された師の業績は尊い。

「虚心淡懷に寛厚包容の態度を以て、熱心に親切に、宗教家は教育を、教育家は宗教を研究理解し、其長短と利弊とを察し、眞に人の爲め國家の爲めに、健全なる教育の進展に努力せられんことを希望する次第である」(遺稿より(同古四九頁))

師の宗教教育に對する理想は、この一文によく表わされている。尙、論文の外、隨想、詩藻等が集録され、師の豊かな人間性と、あの枯淡温容なる風貌を彷彿させるものがあり、泌々と心をうつ。一讀をおすゝめしたい。

おりますが、今、申し上げたような、人間生活の骨組には少しの變りもありません。成程、今までの家族制度には、随分都合の悪い疑點もありました。家の主人が絶對的權力を振うとか、お嫁さんはどんなにいちめられても我慢していなければならぬとかいつたことは、これは改めねばなりません。だからといつて、家族というものを無視して、一人一人が勝手なことをしたのは、世の中は無茶苦茶になつてしまいます。人は矢張り、家族の一員としての、責任と義務を持たねばなりません。そういった責任・義務の中で、家族生活を大きく、一つにまとめて、世々代々安泰にすこして行くにはどうしても、先祖に對する感恩・謝徳の心が必要となつて参ります。

人は木の股から生れたものではありません。今日に、こつやつて生きていられるのは、昨日までの先祖の努力の賜物であり、同時にまた、明日の子孫の繁榮のためでもあります。人間が、少くとも、親と妻と子という家族を持つ以上、先祖を無視することは許されません。ここに、先にも申しましたように、菩提寺と檀家という關係が、少しの不自然さもなく保たれて來たのです。

先祖が定めたお寺、先祖の靈の眠むる墓地。これは、子孫として輕々しく是非すべきではありません。先祖がどうして現在のお寺を菩提寺とを定めたか。そして、その時以

來どれ丈け色々とお寺の世話になつたか。よく反省してみることです。自分の家と自分のお寺との結びつきが、何となく不自然なのは、自分が本當にその信仰を味わつたことがなく、住職とも、胸を開いて話し合つたこともないからであることに、心を留めてみることです。お寺へは、葬式、法事の時丈け行くものと、間違つて考へては駄目です。何ごとにつけ、子が生れた、田植が済んだ、旅行して來た。何でもいいのです。少しのひまが出來たら、お寺へ行くことです。住職と澁茶をのみ乍ら、喋ることです。歸りには墓地にまわつて、お参りもすることです。そうしてこそ、その人はお寺の本當の檀家なのです。

昨今、新興教團が墓地を持ち始めたというのも、こうして昔から行われて來た。日本人の美しい風習に、やつと氣がついたからですが、未だ未だ、そこには營利的な、教團の經濟力を強めようといふ欲から出たツケ焼双的なものが見られます。

家というもの、先祖ということ念頭において、もう一度、自分の信仰をふりかえつてみて下さい。

(來月は「戒名とお佛壇」という題で、書いてみたいと思います。尚、本稿に關して、何か御意見がありましたら、是非おきかせ下さい。)

後記

○落葉たく火の色は一入初冬のおわれを感じて詩情をそゝられる。

しかし、此の月餘、日々、増上寺の山から煙が上るのを見るとやりきれない思いがする。それは、大半の山は西武鐵道の手によつて、くりくり坊主に刈りとり、片端から焼き拂われている、その煙だからだ。聖域もおかまいなく殺風景なコンクリート塀がえん／＼と築かれてしまつた。山は荒れている。

○藝術の秋は終つたが、本誌表紙に御執筆の松濤達文氏は、今秋も新制作派の展覽會に入選された。

○鶴田湛泉氏上京され來室。何か大作をこつ／＼と準備中の由、御精進の程期待する。

○京都家政學園の三枝樹正道先生が、學園のソフトの強チームを率いて團體で來られ、又、大島先生追悼號の事などもあり、お立寄り下さる。

○十一月十九日、宗務所で、敎化團敎學院合同主催による竹中信常氏の新興宗教の構造について研究發表と座談會があつた。

○東京の淨保連例會は、十一月は

佐藤良智先生の明照幼稚園で二十六日に開かれる。二十四日は、明德幼稚園長笠原秀定氏が、全國私立幼稚園協會の理事長就任の祝賀會がある。本宗の此方面の人材は仲々充實しているのは心強い。

(眞野龍海)

○菊の花は美しく清潔な香りを放つてゐる。紅葉もことしはことのほか見事である。芝園邊り一帯の樹木も美しく色どられ、遠方にゆかずして自然美をたのしませて呉れる。

○増上寺の本堂からは、今日も禮讃と念佛の聲が清らかにながれ、道ゆく人々を佇ませている。その人はきつとそこに、人生を正しく力強く歩まんとしてゐる若人の眞摯な姿をみたであらう。

○今月號は加行期に因み、その思ひ出や變遷を、渡邊眞海、村田嘉久子の兩先生に御執筆願ひました。會員皆様には、夫々の立場で興味深くお読み頂ける事と存じます。

○佐藤密雄先生の「佛敎入門」竹中先生の「新興宗教讀本」は、青年の方々に非常に好評を博しています。續いて掲載の豫定ですので御愛讀下さい。(宮林)

○子供のたのしみ——親の見え?——七五三も過ぎて、まさに菊の香り晩秋から冬への氣濃し。

○マンボの後に來たのがチャチャチャとか云うリズムである。既にマンボは流行おくれになつてゐる。まことに人の心は猫の日や秋の空どころの騒ぎではない。また不思議によく流行について行く人があるから結構商賣にもなるのだ。が、商魂たくましく世の藝術家に引摺られてゐる様な點がないでもないが、人情の機微に徹した商法は同じ人氣商賣?でも現今の政治家とは段違ひにうまい。淨土も良い意味での時代の流れに遅れない様にしたい。(水谷)

○今年の「勤勞感謝の日」は、豊かなみのりの中に迎えた。人々はお天氣の良かつた自然の恵みに、ひとしお深く感謝したことである。しかし同時に、そこには土にまみれ、黙々と仕事に打込んでくれた農村の陰の努力が光つてゐた。

○本誌このところ遅刊續き、多くの讀者から御叱正や御激勵をいただく、心から感謝申上げる。年内に十二、正月號とお送りすべく懸命に努力中、何卒お許し下さい。(梅津)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「淨土」十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十年十一月廿五日印刷
昭和三十年十一月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常
發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京品川區上大崎一ノ七八二
發行所 法然上人續仰會

振替東京八二一八七番

佛教曆に「浄土宗要綱」「浄土宗年中行事解説（お詣りの日）」「佛教聖訓集」を添加したもので、浄土宗の施本としては、これにこしたものではありません。

昭和三十一年 浄土宗三寶曆

寺院より檀信徒へ贈る年末年始の贈答品として最適！

○四六判、四十頁。定價一部四十圓、送料八圓。

浄土宗寺院に限り、一部 特價 十五圓。

賣切の場合が御座いますからお申込はお早目をお願いします

東京都港区芝公園十九號地ノ一番
浄土宗教化團中央本部

振替東京六一九三九番

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのまつことで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000
此他各種、一報カタログ送	

配達費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)
組立説明書送付